

C—18 住居意匠の学的体系の特性について  
—住居意匠学の体系的な研究 その 3—

大阪市大家政 上林 博雄

1. 本研究その1では意匠 Design の本質的な定義と生活学的な体系とには矛盾関係があることを示し、その間の調和が消費と生産の循環関係によってえられることを説いた。その2では最近の一般意匠学においても美・機能の外に社会（消費者）という要素が必要とされてきていることを紹介し、これに重点をおいて生活学的な意匠学を確立すべきことを説明した。今回は住居意匠の学問的性質が如何なるものであるかを明らかにしたい。

2. 学問には大別して3つの nature がある。純粋学と応用学の2類のそれである。前者は一般に理学・文学に総括され応用のための目的意識は働かない。次者は工学・農学・医学・家政学等のうち応用のための目的意識が基本的には潜在化しているもの、後者はそれが顕在化しているものである（医学では後2者をグランドと臨床に分けられる）。前2者が本質的に Analizing する学問であるのに対し、後者は前2者をふまえて Composing する学問である。吾々が標榜する生活学は勿論応用学であり、住居学のうち住居意匠学は後者の学的体系をもつものである。

3. 住居学における住居意匠学の研究領域は Function（住居機構学）、Visual Appeal（基礎意匠学）、Social or Consumers' Factor（住生活学）の領域とオーバーラップするものがある（図解）。そして境界領域にある研究が住居意匠の研究とされるのはものをつくるデザイン精神の裏打ちだけの問題である。